

令和 6 年 5 月 28 日現在

機関番号：16301

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2021～2023

課題番号：21K20213

研究課題名（和文）生徒間トラブルの解釈過程に関する教育社会学的研究

研究課題名（英文）The Study on the Interpretation Process of Troubles among Students

研究代表者

梅田 崇広（UMEDA, Takahiro）

愛媛大学・教育学部・准教授

研究者番号：90908899

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、学校における質的調査から、児童生徒間トラブルの生成・変容・消失過程とその過程における教師や児童生徒の解釈枠組みを明らかにすることである。特に本研究は、トラブルが学級内で一度顕在化し、その後潜在化していく過程（不活化過程）に着目し、そのプロセスを明らかにした。その結果、次の3点が明らかになった。第1に、トラブルが「不活化」する過程で、教師・生徒による相補的で複層的なリアリティが構成されていること。第2に、そのリアリティ構成は可変的有、かつ脆く・危うい不安定な秩序のうえに成立していることである。本研究の知見をもとに、「対話」や「話し合い」によるトラブル解決の議論を再考した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、先行研究で看過され、かつ困難とされてきた、児童生徒間トラブルの動的でダイナミックな相互作用過程を質的調査から描き出す理論的・方法論的視座の可能性を開いた点及びそれらの視座から具体的な相互作用過程の特質を描き出した点に意義がある。これらの知見は、質的調査が困難とされてきた「いじめ」に対して、学校現場の「現実」を分析的・批判的に捉えつつ、その「現実」から従来のいじめやトラブル解決の議論を再考しうるものである。ここに、本研究の社会的意義が認められる。本研究の成果は、日本教育社会学会の研究紀要に査読論文として掲載されており、本研究の学術的意義が認められている。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to clarify the process of generation, transformation, and disappearance of troubles among students and the interpretative framework of teacher and students in this process from a qualitative study in schools. In particular, this study focused on the process in which troubles are manifested once in the classroom and then become latent (inactivation process). As a result, the following three points became clear. First, a complementary and multilayered reality is constructed by teachers and students in the process of "inactivation" of troubles. Second, that the reality is structured on the basis of a variable and unstable order that is both fragile and dangerous. Based on these findings, this study reconsider the discussion of trouble resolution through "dialogue".

研究分野：教育社会学

キーワード：教育社会学 エスノグラフィー 児童生徒間トラブル トラブルの生成・変容・消失過程 合意形成

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 1. 研究開始当初の背景

1980年代以降、学校におけるいじめが社会問題化するようになった。日本の先行研究において、児童生徒間で生じる人間関係上のトラブル(以下、児童生徒間トラブル)は、主に「いじめ」という問題カテゴリーに包含される形で研究が行われてきた。いじめ研究では、「いじめ集団の四層構造」論(森田・清永 1994)をベースとしながら、いじめの特徴やいじめが発生・維持・深刻化するメカニズムの解明に大きく貢献してきた。近年では、教師の主観的解釈に注目し、「いじめ」という問題カテゴリーが付与される以前の学校・教師のリアリティに寄り添う研究の必要性が提起され始めている(越川 2017)。

しかしながら、これらの研究では、次の2点の課題を内包している。第1に、児童生徒間トラブルが学級内で何らかの「問題」として構成されるまでの動的でダイナミックな相互作用過程を看過してきた。第2に、トラブルをめぐる相互作用過程が、学級という場においては教師と児童生徒の(再)解釈によって構成される、という視点が十分に反映されてこなかった。

これらを踏まえれば、トラブルが「問題」化される/されないプロセスを教師や生徒によるミクロな相互作用から描き出す本研究は、「いじめ」というカテゴリーが付与される以前の相互作用への着目という研究発展性を有する重要な取り組みとなる。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、学級内における児童生徒間トラブルの相互作用過程に関するフィールドワーク調査から、トラブルから「問題」への生成・変容・消失過程(トラブルの「問題」化過程)とその過程における教師や児童生徒の解釈枠組みを明らかにすることである。

本研究の具体的な内容は、次の2点に整理される。第1に、「トラブルのミクロ・ポリティクス」論(Emerson & Messinger 1977)をベースとし、学級内におけるトラブルの「問題」化過程に関する分析枠組みを再検討することである。第2に、その分析枠組みを用いて、トラブルが学級内で「問題」として構成される/されない相互作用過程、「問題」が消失・収束、あるいは解決・解消されていく過程を描き出す。

## 3. 研究の方法

本研究では、小・中学校におけるフィールドワーク調査で得たデータに基づき、児童生徒間トラブルの「問題」化過程を明らかにする計画であった。しかしながら、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の影響を受け、予定をしていた小学校での調査を十分に実施することができなかった。そのため、既に蓄積をしていた中学校におけるフィールドワークデータを検討することで、課題の遂行につとめることとした。

具体的な調査の概要は次のとおりである。調査対象は中国地方に位置する中学校であり、約3年間のフィールドワークを実施した。フィールドには、筆者の知り合いで、教職歴約30年の教師(A先生)の紹介を通じて参入した。調査に際して、学校長や教員、生徒に調査目的を説明し、許可を得たうえで参与観察を行った。筆者は、A先生が中学1年次から3年次まで持ち上がりで担任を務めた学年及び学級を対象に継続的に観察を行った。観察の頻度は概ね週に1~2回程度である。また、A先生には都度インタビュー調査も実施した。

## 4. 研究成果

本研究の研究計画は、次の2点について明らかにすることであった。(1)児童生徒間トラブルの生成・変容・消失過程を捉える分析枠組みの再検討。(2)質的調査にもとづく児童生徒間トラブルの事例分析である。これらに基づき、本研究の成果を整理する。

### (1)児童生徒間トラブルの生成・変容・消失過程を捉える分析枠組みの再検討

児童生徒間トラブルの分析枠組みについて再検討した。具体的には、「トラブルのミクロ・ポリティクス」論を提唱した著者の一人であるEmersonが検討した、日常的な対人トラブルに関する議論(Emerson 2015)等を参照した。Emerson(2015)では、対人トラブルは、関係のある他者へのいらだち(irritation)や怒り(upset)、心配(worry)を経験したときに生じるものであるとする。そのうえで、トラブルを当事者らにとっての「解決すべき問題」として位置づけるのではなく、それ以前の他者に対する不満やいらだちをトラブルの起源(beginnings)として位置づけなおす必要性を指摘している。そして、そうしたいらだちを感じる行動や状況の性質や原因についての当事者の解釈(interpretations)と、そうしたいらだちや不満に対する応答(responses)という2つのプロセスによって、トラブルの変容が促進される。このようにトラブルを位置づけなおすことで、他者の行動を正したり、解決したりする行動だけでなく、その他すべてのいかなる応答をも分析の考慮に含めることが可能となることが示唆された。

### (2)質的調査にもとづく児童生徒間トラブルの事例分析

本事業期間では、特に一度学級内で顕在化したトラブルが再度潜在化していく過程(トラブル

の不活化過程)に着目し、その相互作用過程の分析を行った。その結果、トラブルが「不活化」する際の教師・生徒による相補的で複線的なリアリティの構成とその危うさの一部を解明した。具体的には次の2点に整理される。

第1に、トラブルの相互作用過程において、一度は学級内で顕在化しながらも、「和解」や「仲直り」といった解決によらず、「仲良くせんでもやっていける」と語り、お互いに対して抱える不平不満や、「嫌い」「関わりたくない」といった感情を問題化せずに不活化させていくリアリティを描くことができた。こうした過程は、教師がそうした関係性を認知しつつも、生徒自身による「自治的解決」として解釈し、教育的にトラブルへの介入を回避することで、相補的に維持・達成されるものであった。ここには教師や当事者生徒らに何らかの明確な合意や認識の一致があったわけではない。むしろ、微細な解釈や認知のズレを伴いながら不確実で不安定な秩序のうえに成り立つものであった。

一方、教師がこうした「自治的解決」の物語を語ることの両義的な特質についても指摘した。第1に、生徒ら自身による「自治的解決」という教師の物語は、トラブルの深刻化あるいは結果としての「いじめ」という視点から見たときに、過去の対応が遡及的に(再)解釈(Emerson & Messinger 1977)され、トラブルの「放置」や「軽視」あるいは「怠慢」「見過ごし」といった教師への批判的な物語に容易に取って代わられるリスクを有しているという点である。そうなった時点で、教師たちが生徒たちによる「自治的解決」の物語を語り続けるのは困難となる。第2に、一方で、トラブルの「放置」を正当化するための「言い訳」として、教師たちに用いられかねないという点である。そのうえで、本研究で得られた知見は、筆者と教師の解釈実践を通じて、不確実性や不安定性を伴う状況に向き合い、トラブルの変容結果次第では両義的に捉えられうる教師のローカルな実践知の一端に接近するものであったと位置づけた。

第2に、教室でのトラブルをめぐるリアリティが複線的に紡がれている可能性があることが示唆される。このことは、単に学級内で常に個別の異なるリアリティが紡がれているということの意味するのではない。本研究が示してきたのは、トラブルの問題化や解決的行動としての話し合いを契機に、学級内のメンバー間で一時的・局所的にトラブルをめぐるリアリティが共有されうるものの、その前後ではそれぞれの解釈や対応によって個別のリアリティが再構成されていくという可能性である。

この知見は、「対話」や「話し合い」によるトラブル解決の議論に再考を促すものである。すなわちそれは、対話によって産出された何らかの「解決」や「合意」は、それをもってトラブルの「終わり」を意味するのではなく、それをもとに当事者たちが個別のリアリティを再構成していく資源であるということ。加えて、対話による「解決」の産出が、教室でのトラブルをめぐる解釈や認識の一致を保証し続けるものとは限らないことを示唆している。ここに、複線的なリアリティ構成の脆さ・危うさが指摘できる。この点は、教師主導の解決であれ、生徒主導の解決であれ、同様のことが指摘できる。

本研究は、教室「内」での相互作用に限定している点に限界がある。トラブルをめぐる解釈実践に参与するのは、教室内の教師と生徒だけではなく、学校内の他の教師やスクールカウンセラー、生徒の保護者も、トラブルの変容や解釈実践を構成する重要なアクターとして想定される。教室外のアクターの解釈実践にも目を向け、トラブルの相互作用過程をより立体的に描いていくことが今後の研究課題である。

#### 引用・参考文献

- Emerson, R. M., 2015, *Everyday Troubles: The Micro-Politics of Interpersonal Conflict*, The University of Chicago Press.
- Emerson, R. M. & S. L. Messinger, 1977, "The Micro-Politics of Trouble", *Social Problems*, 25(2), pp. 121-134.
- 越川葉子, 2017, 「『いじめ問題』にみる生徒間トラブルと学校の対応」『教育社会学研究』第101集, pp. 5-25.
- 森田洋司・清永賢二, 1994, 『新訂版 いじめ』金子書房。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 篠原巨輔・梅田崇広	4. 巻 69
2. 論文標題 合意形成における判断基準の変容過程：小学校低学年の事例から	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 教育学研究紀要（CD-ROM版）	6. 最初と最後の頁 25-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 伊勢本大・白松賢・梅田崇広・藤村晃成	4. 巻 112
2. 論文標題 教師の生きられた経験と専門職としての資本：コロナ感染拡大期の学校における意思決定に着目して	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 教育社会学研究	6. 最初と最後の頁 31-51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 梅田崇広	4. 巻 19
2. 論文標題 学級における合意形成に関する先行研究の検討：「合意」に着目した学級成員間の相互作用過程の研究に向けて	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 教育学論集	6. 最初と最後の頁 1-6
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 梅田崇広	4. 巻 111
2. 論文標題 生徒間トラブルの不活化過程の記述 - 教師と生徒による不活化過程の相補的達成 -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 教育社会学研究	6. 最初と最後の頁 45-64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 篠原亘輔・梅田崇広
2. 発表標題 学級における合意形成・活用過程 - 小学校低学年の事例から -
3. 学会等名 中国四国教育学会第75回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 梅田崇広
2. 発表標題 生徒間トラブルの不活化過程の記述
3. 学会等名 日本教育社会学会第74回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 UMEDA Takahiro
2. 発表標題 Turning a Perspective from "Bullying" to "Trouble": Considering the Issues and Analytical Framework of the Qualitative Research on "Bullying"
3. 学会等名 The 27th Taiwan Forum on Sociology of Education (国際学会)
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------